

H. D. Thoreau の自然観*

—その二重性について—

六 川 信**

Henry David Thoreau (1817-1862) は、通例、Emerson の影響をうけた超絶主義者と考えられている。けれども、彼を超絶主義という枠の中でのみ考えることは危険である。Emerson の *Nature* (1836), *The American Scholar* (1837), *Divinity School Address* (1838) と Thoreau の *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (1849), *Walden* (1854), *The Maine Woods* (1864), *Cape Cod* (1865) とをつぶさに比較しつつ読むとき、我々は、Emerson と Thoreau の二人の文学の世界の異質性に気付く。Thoreau の作品には超絶主義という一枚岩で割り切ることのできないものが含まれている、という印象をうける。*A Week* と *Cape Cod* とでは、その濃淡の差はあまりにも大きい、彼の作品には、むしろ超絶主義とは異なると思われるようなリアリズムの香りが漂っている。超絶主義が一定の定義をくだしえない程漠然としたものである、という事情によるのかもしれないが、Thoreau の自然は、常に自然の具体的事物に密着して、超絶の世界にさまよいでることが少ないためであろう。

自然の事物をリアルに克明に観察しようとする Thoreau の態度が、彼のどの作品にも如実に現われていることに気付く。特に、1850年以降の *Journal* はきわめてリアリスティックで、Walden Pond の測定や植物の成長の記録など、自然の事物そのものや季節気象などの詳細な観察記録で埋まっている、といつてよい。

Cape Cod に例をとろう。この旅行記の冒頭は死のイメージで始まるが、Thoreau は自分の見たものを具体的にリアルに読者に提示する。Cohasset の海岸での難破船と乗船していた Ireland からの移民たちの死体の散乱。Thoreau は、感情を抑えたハード・ボイルドな手法で、非情な死と死骸を描写する。このとき、読者は戦慄をおぼえ鬼気せまるのを感じる。鉄の船を岩に激突させ卵の殻のように砕いてしまう海の恐怖は、老人 John Newcomb の口からも体験的に語られる。荒々しく野性的で非人間的な恐い海の姿が読者に伝わる。Cod 岬は所により 300 フィートの深さにも達する砂地であり、植物が容易に生育しない荒涼たる不毛の土地である、と Thoreau は述べ、砂の恐怖を次のようにかく。“The sand is the great enemy here. …The sand drifts like snow, and sometimes the lower story of a house is concealed by it, though it is kept off by a wall. The houses were formerly built on piles, in order that the driving sand might pass under them.”⁽¹⁾

Thoreau の作品にただようリアリズムの香りに加えて、Emerson 的ロマンチズムがそこに色濃く流れていることも事実である。言いかえれば、それは Thoreau の神秘主義ない

* 昭和49年4月 ヘンリー・ソーロウ協会において発表

** 一般科英語助教授

原稿受付 昭和50年9月27日

しは超絶主義といってもいいものなのであるが、彼のこの面に焦点をあてそこにのみ何もかも収斂させてしまうとすれば、Thoreau の独自の文学の世界にせまることは不可能に近いだろう。

Thoreau の文学のロマンチズムの色調とリアリズムの香りは、彼の自然に対する態度の二重性から生まれる。すなわち、彼には、博物学者として自然を客観的、実証的に眺めようとする自然の外側への志向と、自然観照の詩人として自然に直覚的にせまろうとする人間の内側への志向があるからである。この彼の自然観の二重性が作品の中に現われたとき、その二面を、自然科学者の側面、自然観照の詩人としての側面と呼んでいいだろう。筆者は、この二つの側面を、彼の代表作 *Walden* の中に、特に強く感じる。

当然ながら、この両側面によってきた理由、作品の中での両者の関わりあい、更には、Thoreau という作家の中でこの両者がどう存在したのか、ということが問題とされるだろう。これらの問題を考察することにより、近代文学者 Thoreau の実相がはっきりと浮かびあがってくるように思われる。本稿では、彼の傑作 *Walden* を中心にすえて、これらの問題をめぐって検討を試みることとする。

1

本題に入る前に、Thoreau の作品の形式と中味のかかわり合いを考えておきたい。*A Week*, *The Maine Woods*, *Cape Cod* のどれも旅行記の形式をとる文学作品である。*A Week* は、二週間の旅が一週間に圧縮され、兄 John との旅の思い出の随想集になっている。*Cape Cod* では三回におよぶ岬への旅が10章からなる一冊本に仕上げられている。*Walden* は二年間の生活実践が一年間にまとめられているが、この自叙伝的体裁をとった作品を旅行記の一種と考えていいのだろうか。

Thoreau が *Walden* の稿をおこし始めたのは、1846年の末かその翌年の初頭のことであり、1847年秋には初稿を書き上げていた。だが、それは、1854年に出版された *Walden* のおよそ半分の長さのものであった。従って、七年間の才月のうちに、書き伸しや追加が行われ、膨大な量の推敲が行われたことになる⁽²⁾。作品の書き出しは特に工夫をこらされた、と推測しても強ち的はずれでもないだろう。それは次のように始まっている。

When I wrote the following pages, or rather the bulk of them, I lived alone, in the woods, a mile from any neighbor, in a house which I had built myself, on the shore of Walden Pond, in Concord, Massachusetts, and earned my living by the labor of my hands only. I lived there two years and two months. At present I am a sojourner in civilized life again.⁽³⁾

この一節を一読すると、Concord の村の人々が Thoreau の森の生活について念の入った詮索だてをすることへの報告が、端的にまとめられているように感じる。なぜなら、この一節の少しあとに、“I should not talk so much about myself if there were anybody else whom I knew as well.” (W, 1) とあるためであり、また、彼が *Walden* 湖畔での生活実験をおえて小舎を去るとき、*A Week* を単行本の形で出版するための原稿と *Walden* の初

稿を携えていたことが事実であるためかもしれない。更に、自分で建てた小舎で二年二ヶ月の独居生活をおくり Concord の村へ帰ったことも事実であるせいかもしれない。

しかし、Thoreau はこの冒頭で、生活報告を手際よくまとめてみせているだけなのだろうか。作者 Thoreau の意図が奈辺にあったのかは分からないが、読者である筆者は、それ以上の意味をこの一節の中に感じないわけにいかない。そもそも、この一節は初稿にはなく後に追加されたものであること、また、周知のように、*Walden* は二年間の生活実験を一年の季節のサイクルの中にまとめ上げられたイマジナティブな文学作品であることを思うとき、特別の意味をここに感じるのである。つまり、“civilized life” ということばは、Thoreau が様々に批判する物質主義的機械文明の人間社会を指す。人里離れた森の中で独居生活をおくる Thoreau の姿は、人生の探求者 Thoreau を暗示する。すると、自ら、俗世界から「聖地」なる自然に赴く巡礼者 Thoreau の人物像が浮かび上がってくる⁽⁴⁾。“again” という語は旅の終わりを表す。John C. Broderick のことばをかりて言えば、ここには、「旅に出てまた戻ってくる運動」(“out-and-back” movement) が⁽⁵⁾、典型的に暗示せしめられていると考えていいだろう。要するにこの一節は、以下に述べるのは旅行記であることを暗示する役目を担っている、といえる。作品全体で考えてみても、序章 “Economy” で、Thoreau が *Walden* 湖畔に行き春小舎を建て始め、その年の夏そこに住み始めたことが述べられ、終章の直前 “Spring” の章では、森の生活という旅が終わり、Concord の村へ帰ったことが語られている。そして、その旅の間に Thoreau が何を見、どんな体験をし、何を考えたかが 18 の章に盛り込まれている。こう考えてくると、*Walden* が旅行記の形式をとる作品であることが明らかになる。

Moldenhauer も指摘するように⁽⁶⁾、*Walden* の語り手「私」はフィクショナルな「私」である。Thoreau はこの語り手に旅を報告させるという形で作品を作り上げている⁽⁷⁾。語り手は旅で目に映じた世界と旅の実体験を語るが、更に旅で探求した自己の内面世界をも語る。前者は客観的に人間以外の外部の自然を見つめる態度であり、後者は人間の中の人間を考える態度である。こう考えると、旅行記という形式は二つの面を盛りこむのに恰好な文学形式といえる。Thoreau の自然科学的側面と自然観照の詩人としての側面が吐露されるにも、*Walden* が旅行記という形式をとることが最適であった、と考えられる。

2

Thoreau は博物学を好んだ。彼の *Journal* やその他の作品に見られる自然観察の記録は精緻を極める。このことは、植物学、動物学、魚類学などの面における彼の造詣の深さを証明する。特に植物学は彼の得意とするものであり、作品中に、植物名、植物学専門用語が頻出する。このため、植物学の知識なしに彼の作品を理解することは困難であろう。*Walden* の 211 ページを開けると、“golden-rods,” “pinweeds,” “cotton-grass,” “cat-tails,” “mull-eins,” “johnswort,” “hard-hack,” “meadow-sweet,” “wool-grass,” “life-everlasting” の 10 箇の植物名の単語を発見する。この作品全体では、“black-birch,” “yellow-birch,” “beech,” “bass” “hornbeam” などの樹木の名前、“biennial,” “radicle” などの植物学用語等々が多数現われる。次は *Cape Cod* からの引用であるが、彼の植物学の知識の並々ならぬことを示す一例である。

The plants which I noticed here and there on the pure sandy shelf, between the ordinary high-water mark and the foot of the bank, were Sea Rocket (*Cakile Americana*), Saltwort (*Salsola kali*), Sea Sandwort (*Honkenya peploides*), Sea Burdock (*Xanthium echinatum*), Sea-side Spurge (*Euphorbia polygonifolia*); also, Beach Grass (*Arundo*, *Psamma*, or *Calamagrostis arenaria*), Sea-side Golden-rod (*Solidago sempervirens*), and the Beach Pea (*Lathyrus maritimus*).⁽⁸⁾

A Week では、pickerel (*Esox reticulatus*), pout (*Pimelodus nebulosus*), shiner (*Leuciscus chrysoleucus*), dace (*Leuciscus argenteus*), perch (*Perca flavescens*) 等の魚類の生態の詳細な説明がある。The Maine Woods の Appendix には、Thoreau 自身の観察になる植物、鳥類、喬木、灌木、野草、四足獣のリストが23ページにわたって整理されている。鳥類は37種かかげられており、その中4種には疑問符がついている。これは、科学者としての真面目さを示すものといえよう。

Thoreau は有能な測量士でもあった。彼は、1846年の冬初めて、Walden Pond を測量した。彼は、池の形と深さの分布等を示す約2000分の1の図を残している。それによると、池の広さ61エーカー、周囲1.7マイル、池の最長距離は175 $\frac{1}{2}$ フットとある⁽⁹⁾。それから一世紀後の1942年、訓練をつんだ有能な湖沼学者 Edward S. Deevey, Jr. が最新の測定器具を用いて Thoreau の測定値を検証したが、Deevey は Thoreau の測定の正確さに驚いたという⁽¹⁰⁾。この図は1854年の Walden の初版本に縮尺を小さくして入れられた⁽¹¹⁾。Walden の内容とは直接関係のないこの池の図を入れたことは、Thoreau の博物学への熱心な傾倒を示すものといえるだろう。Thoreau は気象にも強い関心を示した。Walden の“Ponds”の章から一例を上げよう。

The temperatur of the pond water which had stood in the room where I sat from five o'clock in the afternoon till noon the next day, the sixth of March, 1846, the thermometer having been up to 65° or 70° some of the time, owing partly to the sun on the roof, was 42°, or one degree colder than the water of one of the coldest wells in the village just drawn. (W, 126-127)

池の水温、直径、周囲の測定及び自然の観察記録を徹底して行うには、相当の時間とエネルギーを要したであろうことは想像にかたくない。それには Thoreau に烈しい程の自然への愛着がなければできないことであった。

1906年、20巻の Thoreau 全集 Walden or Manuscript Edition が出版された。そのうち14巻は Journal であった。この Journal を、科学者たちは、アメリカ博物学研究の重要な文献であると激賞した。そして、Thoreau は「アメリカ生物気候学 (phenology) の父」とよばれ、湖沼学者 (limnologist) としても生態学者 (ecologist) としても、高く評価されるにいたったのである⁽¹²⁾。特に1850年以降の Journal を読むとき、Thoreau がもし長寿を全うし、自然研究を進めていったならば、近代科学の著名な博物学者になっていたのではないか、と思われてくる。Thoreau は1855年の春病に陥り、身体は衰弱し意気銷沈し、病氣も完全に

いえることはなかったが、自然への愛着と自然研究への情熱は何ら失われなかった。晩年の彼が動物や植物の研究の中に生き甲斐と幸福を見出していたようすは、*Journal* が何よりもよく物語っている。また、*The Succession of Forest Trees* (1860) という優れた論文もそのことを明白に証明する。

Thoreau の作品に現われた彼の自然科学者の側面を実証的に論じてきたが、この側面は彼の自然観とどうかかわっているのだろうか。言いかえれば、この側面は彼のどんな自然観に支えられていたのだろうか。逆に言えば、自然科学者の側面があるという事実は、彼がどんな自然観を抱いていたと推論できるだろうか。Thoreau は “If you have built castles in the air, your work need not be lost; that is where they should be. Now put the foundations under them.” (W, 221) “It affords me no satisfaction to commence to spring an arch before I have got a solid foundation.” (W, 225) と述べている。“arch” とか “castles in the air” とかいう語句が、後に述べるような超絶主義者 Thoreau の観念の世界を暗示するのだとすれば、その世界の土台としての実体としての自然の研究の必要性を強調していると読みとってよかろう。とすれば、彼は、客体としての自然の研究を第一に考えていたことになる。文学者 Thoreau の出発の原点は、実体としての自然にあったといえよう。彼が観念的に自然を考える以前に、事実としての自然に愛着をもち、それとの近接感を主張するのは、彼にとって必要欠くべからざるものであったからである。

Emerson は、物自体すなわち現実の世界は大霊をかくしている仮面だと論じたが、Thoreau は自然を実体のあるものとしてとらえた。実在としての現実の自然こそが、すべての芸術、哲学、宗教の唯一の土台となり基礎となる、と Thoreau は考えた。Thoreau は、Emerson から自然を見ることについてよりも、自然について考えることを学んだ。しかし、抽象概念に閉じこもることを嫌い、実体としての自然に格別愛着をいただいていた。Emerson は思索から出発したが、Thoreau は観察から出発したのである。Emerson は、神が実在であり、自然の現象界は単なる幻影にすぎないと考えたが、Thoreau は、観念論者は先ず実物主義者として出発しなければならないと考えた。⁹⁴ 従って、Thoreau は文献から得た知識を単に知識として保持していることはしなかった。自ら進んで自然に入り、知識をもとに直接自然に接して研究を深めるという態度をもっていた。こうした事物に密着する態度と自然を実体あるものとして考える自然観は、ロマンチズムの文学思潮の中では特異であって、むしろリアリズムを志向している態度であり、ここに Thoreau の文学者としての現代性が存在すると考えてもいいのではなかろうか。

さて、問題は、トランセンデンタリストと自他共に認めていた Thoreau が、なぜこれ程まで自然に対して客観的態度をとってのぞんだかということである。旅行記はアメリカ文学の中で一般的な形式だが、旅行記の文学的興味は、旅行者が見たことよりも、むしろ旅行者自身の思想と内面生活にある。特に、超絶主義者の立場からすれば、精神的旅こそが真の旅と考えられるべきものであろう。しかるに、旅行記の形式をとる Thoreau の作品には、「博物誌」の香りがする程に、自然観察の記録が豊富にもりこまれているのはなぜであろうか。自然への愛と尊敬があったからであると考えられるが、Emerson にも自然への深い愛があったのである。けれども、Thoreau には、Emerson のように直覚的に飛躍するところがなく、自然を実体あるものとする自然観をもち、その自然現象の詮索または実証の精神があ

った、といえよう。では、Thoreau に特有な実体としての自然への密着の精神はどのようにして形成されたものなのだろうか。

Thoreau は生来の自然愛好家であった⁴⁴。Concord の森や牧草地や川や池が幼年時代の彼の遊び場であり、自然のふところに抱かれて成長した。母の Cynthia Thoreau は、子供に自然愛好の精神をはぐくませようと熱心であり、しばしば、野鳥の声を聞かせて子供らを野外につれていった⁴⁵。天気の良い午後は、草花や鳥の声をたのしみながら野外で食事をしたが、それも、彼の母のそのような願いによるものであった。こうして生まれた Thoreau の自然愛の炎は、兄の John のノートから鳥類の知識を吸収し、書物を通じて博物学の知識を培っていくにつれて、益々燃え上がっていった。Harvard College の学生のと看、Cambridge の原野や Charles 川の岸辺に遊び、その岸辺に立つ木の穴のいたちの巣を見に訪れることを日課にしたこともあった⁴⁶。かくして、彼は自然を愛する青年に成長していた。この生来の自然への愛着心は、彼の文学の土台となっている。

Emerson が Thoreau の博物学研究を啓発しようとしたこともあった。Emerson が Massachusetts 州出版の “Scientific Surveys of Massachusetts”——T. W. Harris の *Insects*, Chester Dewey の *Flowering Plants*, D. H. Stover の *Fishes, Reptiles and Birds*, Ebenezer Emmons の *Quadrupeds* を含む——を入手し、Thoreau にこの評論を書くように要請した⁴⁷。その結果、Thoreau の最初のエッセイ “The Natural History of Massachusetts” が生まれた。これは1842年に *Dial* に発表された。Emerson の期待に反して、このエッセイが超絶主義的傾向の強いものとなっているのは、*Nature* の影響が Thoreau の心髄に達していたからであろう。

彼が自然科学の研究にのめりこんでいったのは、1847年以降と考えられる。Jean Louis Rodolphe Agassiz (1807-73) 博士が Harvard 大学教授として Boston へ現われたのは1846年秋であった。Louis Agassiz はスイスの自然科学者で、当時西欧で科学思想の偉大な指導者であった。彼のアメリカでの研究の目的は、アメリカの植物誌と動物誌の完璧な完成にあった。1847年、Thoreau はそんな Agassiz に標本を送り交渉を開始した⁴⁸。当然、Thoreau の自然研究の興味がかきたてられた。彼の見る自然も描く自然も生きた具体的なものと広がり、植物が花をつけ授粉しそして葉をつける姿を緻密に観察するようになった。木の芽生きの時期、渡り鳥の到来日、植物の開花時期などを調べ始め、標本の目録を作り出した。植物学の専門書も集め、当時アメリカの高名な植物学者 Asa Gray の著書も求めた⁴⁹。Thoreau は自然への逍遙と思索から自然の科学的観察研究へと傾斜していった。哲学的トランセンデンタリストが科学的サイエンティストへ重層的に変貌していった。Louis Agassiz の Thoreau に与えた影響は、Emerson の *Nature* の影響に優るとも劣らぬものがあつたのである⁴⁹。Thoreau 自身次のように書いている。

I fear that the character of my knowledge is from year to year becoming more distinct and scientific; that, in exchange for views as wide as heaven's scope, I am being narrowed down to the field of the microscope. I see details, not wholes nor the shadow of the whole. I count some parts, and say, “I know.” (*Journal*, August 19, 1851)

ここには、Thoreau の Emerson の世界から Agassiz の世界への急速な移行が見られる。Thoreau の自然観照の詩人の側面が後退し、自然科学者の側面が前面に出てきたのである。尚また、経済の進展、科学の興隆によって、近代産業社会の形成が始まった19世紀中葉のアメリカは、全般に現実的で、科学への関心が高まった時代であったから、この時代風潮が Thoreau に反映しているとも見られる。Thoreau が死んだとき、1000点以上の押葉と New England 地方の野鳥の卵と巣のコレクションが残されていた。彼の母と妹は、これを The Boston Society of Natural History—Thoreau は1850年この通信連絡員にえらばれ、博物館の文献を利用する特権を与えられていた——に寄贈した。ここに、博物学者 Thoreau の面目躍如たるものがある。

3

次に、自然への旅人 Thoreau の人物像を *Walden* の表現の中にさぐり、彼の自然観照の詩人としての側面を考えてみたい。Thoreau は自然を見つめ徹底的に観察研究する態度をもっていたが、自然に耳を傾け自然に学ぼうともした。自然は、Thoreau にとって、研究対象以上のものであったのである。彼は、自然を敬虔視し、「母なる自然」、「教師たる自然」と考え、自然現象を神聖なる神の現われとしても考えた。清教徒たちが、悪魔のイメージをもつ「蛇」をすらし、「あきらかに、人々の信心を試し確かめるために神の許から使わされた使者」^脚と感じたのは、自然が彼等にとって教導師であったからであるが、ここで我々は、Thoreau の自然の「意味」の解釈と清教徒的自然観の類似性に気付く。Thoreau は、自然を“mother of humanity” (W, 210) と語り、“Nature” を女性人称代名詞を用いて書くのが常である。また、自然を人格視する傾向が強く、自然の事物の人格化の箇所をあげれば枚挙にいとまがない程である。自然の中に神をみてとり、自然を通じて神に近ずき、神を求めようとする Thoreau の自然への姿勢は、*Walden* 全体に太い流れとなって脈打っているのである。

自然の神聖さと清浄さを感じ取る Thoreau は言う。“The indescribable innocence and beneficence of Nature,—of sun and wind and rain, of summer and winter,—such health, such cheer, they afford forever!” (W, 95) Thoreau の目には、松の林は神殿であり、森や沼地にそびえる樹木は社であると映じ、自然の中に畏怖を直覚するのも、自然に宿るこうした清浄さと神聖さの故である。永遠・春・純粋性の象徴である Walden Pond を、Thoreau は、入口も出口もなく冷たい水をたたえた恒久に底なしに深い池であると描き、この池の清浄さについて次のようによくくり返し述べている。

“Walden is a perfect forest mirror, set round with stones as precious to my eye as if fewer or rarer. …It is a mirror which no stone can crack, whose quicksilver will never wear off, whose gilding Nature continually repairs; no storms, no dust, can dim its surface ever fresh; …” (W, 130) “The pure Walden water is mingled with the sacred water of the Ganges.” (W, 203) “White Pond and Walden are great crystals on the surface of the earth, Lakes of Light. …They are too pure to have a market value; they contain no muck. How much more beautiful than our lives, how much more transparent than our characters, are they! We never learned meanness of them.” (W,

137-138)

聖なる水を満たす Walden Pond. そのほとりに立つ Thoreau の小舎も、また神聖であり俗世界の文明によって腐敗されていない場所であった。“Where I lived was as far off as many a region viewed nightly by astronomers. …my house actually had its site in such a withdrawn, but forever new and unprofaned, part of the universe.” (W, 60) この小舎を本拠として、自然の中に入り、自然に直接触れ、自然を逍遙する Thoreau は、自然の清浄さと神聖さを感知するばかりでなく、そこに宿る霊を直覚する。フクロウの鳴き声の中にも蛙の鳴き声の中にも、Walden Pond の水の広がりにも、霊の存在を知るのである。

更に、“Spring” の章に示されているように、自然界の再生と清浄作用の能力及び自然の野性のもつ生命力が Thoreau を感動させ、心をとらえて離さない。彼は、自然の営みの中に躍動する生命力をみてとるのである。この生命力は力であり神秘であった。自然に没入するという直接体験の中で、神秘的な自然の姿と力を直観し、Emerson の理論を確かめ、有機的な自然観（宇宙観）を打ちたてるのである。Thoreau の有機体説 (organicism)²³ を表す一例を次にあげる。

The earth is not a mere fragment of dead history, stratum upon stratum like the leaves of a book, to be studied by geologists and antiquaries chiefly, but living poetry like the leaves of a tree, which precede flowers and fruit,—not a fossil earth, but a living earth; compared with whose great central life all animal and vegetable life is merely parasitic. (W, 210-211)

書物の紙は mechanic に重なっているのに対し、樹木の葉はその一枚々々が樹木全体の生命の一部としてその生命を保つ。葉と樹木は organic な統一体になっているのである。宇宙の森羅万象も、因果法則によって機械的に支配されているというよりも、すべては霊の力によって結びつけられ、偉大な中心的生命に連合し、宇宙全体が有機的な統一体になっている。こうした宇宙感によれば、宇宙の真実在は霊であり、万物はその背後に遍在する霊の中心的な見えざる「一」なる霊に結びついていることになる。従って、すべての自然の事象は宇宙の「一」なる霊の一つの器官であり、人間も霊を宿す器官なのである。Thoreau はこの中心的生命を、“the perennial source of our life” (W, 92) とか “that everlasting Something”²⁴ と言うが、そのいずれも Emerson の “the eternal One”²⁵ と符合すると考えてよい。Emerson も Thoreau も organicism の宇宙観をいっていたのであって、両者は同じく超絶主義者であったのである。ただ、Thoreau の場合、この自然観を理論として理知的に理解し信じ込むというよりも、体験的に感得するという道をとった。従って、年令と健康の衰えに比例して直観力やイマジネーションが減退すると、この自然観が崩れていったのである。Philip Walter Eaton が解明させてみせているように²⁶、Thoreau には文学者としての成長と発展があったのであり、彼の自然観を論じるときにも、共時的、通時的の両方の角度から迫る必要がある。

さて、Thoreau の描く自然には興味ある二面性が見られる。A Week では静かな優しい

自然がロマンの筆にのせて描かれる。“Saturday”の章の Thoreau がもっとも愛した川の花の女王、睡蓮 (water-lily) の描写に例をとろう。それは美しい水彩画を見るが如くである。自然に入り、自然に接し、自分の瞳でじっくりと見つめた早朝のその花が、日の出の陽の光と共に、パッと一斉に開花するすがすがしく清らかな美しさが、読者に伝わってくる。Walden では隣人としての親しい自然が語られる。ウサギは小舎の床下に住み、小鳥は Thoreau の肩にとまり、リスは彼の靴の上をはいまわり、ネズミは彼の手の平でチーズをつまむ。

これとは別に、*The Maine Woods* の自然は厳しく冷厳である。人跡未踏とも言える絶え間なく続く原始林の中を流れる川とそこに点在する湖。Thoreau は激流を越え野営をし、Ktaadn を目指してそんな自然を進む。その山頂に近い尾根に立ち山頂を眺めるとき、Thoreau は巨大な非人間的な冷酷な自然に不意打ちを食わされる。その自然を彼は次のように感じる。“She does not smile on him as in the plains. She seems to say sternly, why came ye here before your time? This ground is not prepared for you.”¹⁰⁸ Concord 周辺の優しい自然とは全く異質の自然を Thoreau は初めて知る。人を寄せつけない自然の恐怖と畏怖などを彼は述べる。“Nature was here something savage and awful, though beautiful. I looked with awe at the ground I trod on, … Man was not to be associated with it. It was Matter, vast, terrific, —not his Mother Earth that we have heard of, …”¹⁰⁹ 激流がとうとうと流れ、熊、狼、大鹿など野性の動物が出没する *The Maine Woods* の自然は、冷酷で荒々しく恐怖に満ちている。これは、先に述べた *Cape Cod* の荒涼たる自然と同質である。例えば、彼は岬を次のように述べる。“The Cape was not as on the map, or seen from the stage-coach; but there I found it all out of doors, huge and real, Cape Cod! as it cannot be represented on a map, color it as you will; the thing itself, than which there is nothing more like it, no truer picture or account; …”¹¹⁰ “It was Matter.” という表現も “the thing itself” という語句も、Thoreau の好む優しい自然とは異なり、「そこ」にある実体としての自然を表わしているといえる。

Thoreau の描くそのどちらの自然も、空想と想像の中に美しく甘美に描かれた田舎と田園の自然ではない。生まの自然であり、“wilderness” なのだ。それは、「荒野」——「あれはてた野原。あれの。」(広辞苑)——という日本語のイメージをはるかにこえて、荒れはてたさくばくとした field を指すのは勿論だが(例えば *Cape Cod* の場合)、むしろ、湿めっばい奥まったところにある野生の動物の生息するうっそうとした自然林を暗示する。

Thoreau は自然を単に美しいものとは解釈していない。彼の自然の見方の中には、後の Naturalism を思わせるような面が見られる。これは、彼の自然のリアルの見方と言えよう。ここにイギリスのロマンチズムとの差異があり、Thoreau の興味ある一面がある。先に、非人間的な冷酷な自然を Thoreau は知った、と述べたが、彼の描く gentle な自然に対比するとき、wild な自然は冷酷であるという意味である。彼の文学全体のコンテクストの中で考えれば、Naturalism のそれとは異質なものである。

先にも言及したが、Thoreau は自然の中に野性 (wildness) を直観する。これについては、Walden の “Brute Neighbors” の章に細かく描かれているが、その章で語られる蟻の合戦の実相は正しく荒々しい自然の象徴である。生死をかけた赤蟻と黒蟻の死闘は、自然の弱肉強食の姿の縮図であり、生命を維持するために生命が犠牲になるという自然の掟として述べ

られている。「自然に還れ」と言ったルソーの自然は、あくまで優しくのどかな牧歌的な田園の自然である。これに反して、野性の笑いと音に満ち、野性の洗い熊が生息する森や沼地のある自然林と wilderness, これが Thoreau の描く自然である。彼は、そこに、清浄さと神聖さに加えて、原始的な生命力と活力とを直観するのである。雷雲や嵐や雨の中に無限に宿されている活力は、人習の健康を養い、心霊を充実させ、人間に力を与えるものなのである。Thoreau は言う。

The West of which I speak is but another name for the Wild; and what I have been preparing to say is, that in Wildness is the preservation of the World. Every tree sends its fibres forth in search of the Wild. ... From the forest and wilderness come the tonics and barks which brace mankind. Our ancestors were savages. The story of Romulus and Remus being suckled by a wolf is not a meaningless fable. The founders of every state which has risen to eminence have drawn their nourishment and vigor from a similar wild source. ... Life consists with wildness. The most alive is the wildest.²³

Thoreau が Walden Pond から人跡稀な西方にさまよい、夕食にコケモモ (huckleberries and blueberries) をつんで食べるのも、“Our village life would stagnate if it were not for the unexplored forests and meadows which surround it. We need the tonic of wildness, ...” (W, 216) と書くのも、自然の野性の湧き出るような生命力を求めていたからに他ならない。文学においても野性こそが生命なのだ。“In literature it is only the wild that attracts us.”²⁴ こう見てくると、Thoreau の全生涯は、彼自身が “There is in my nature, methinks, a singular yearning toward all wildness.”²⁵ と述べているように、あくなき野性の探求の旅であったともいえよう。特に、生涯の最後の10年間は、病弱の身の Thoreau にとって、野性への憧憬と探求は、健康回復へのあくなき希求と表裏一体なものであった。

Thoreau は自然の中に、神聖にして崇高な姿と、神秘的な原始的生命の横溢する野性の姿とを見た。更に重要なことは、自己の精神の世界にも、彼はこうした二重性を認識したことである。すなわち、自己の内面世界における神聖な生活を志向する本能と野性なものへのむかう本能との認識である。Walden の “Higher Laws” の章の初めに次のように述べられている。

I caught a glimpse of a woodchuck stealing across my path, and felt a strange thrill of savage delight, and was strongly tempted to seize and devour him raw; not that I was hungry then, except for that wildness which he represented. ... The wildest scenes had become unaccountably familiar. I found in myself, and still find, an instinct toward a higher, or, as it is named, spiritual life, as do most men, and another toward a primitive rank and savage one, and I reverence them both. I love the wild not less than the good. (W, 144)

この野的な本能は、高きへ向かう本能と反比例して高まるものであり爬虫類的で肉欲的なものである、と Thoreau は説明を加える。A *Week* の “Tuesday” の章でも、“We are double-edged blades, and every time we whet our virtue the return stroke straps our vice.”⁴⁴ と述べ、人間の内面の獣性と神性の奇怪な二重性に言及している。この人間精神における純粹性と野蛮性、言うなれば、宇宙における事物の二重性の認識は Emerson から更に Coleridge と Platon から学んだものであった。この昔からの事物の二重性、理想と現実、高い法則を志向する本能と低きへ向かわんとする本能は、意識の二重性となって現われる。自己の本能の二重性を統一し、自然の二重性を完結しようとする生き方の中で、“the perennial source of our life” を見出さんとするが、Thoreau 自身 “What I Lived For” の章で述べている如く、彼の自然への旅の最大の眼目なのであった。

4

Thoreau は森への旅の目的を、*Walden* の最もよく知られた次の一節に述べている。

I went to the woods because I wished to live deliberately, to front only the essential facts of life, and see if I could not learn what it had to teach, and not, when I came to die, discover that I had not lived. I did not wish to live what was not life, living is so dear; nor did I wish to practice resignation, unless it was quite necessary. I wanted to live deep and suck out all the marrow of life, ...to drive life into a corner, and reduce it to its lowest terms. (W, 62)

“teach” という語に合せて、この一節にただよう強烈な宗教的雰囲気から、Thoreau が自然を人間に利益と教えを授ける教師と考えていたことは明白である。「教師たる自然」の中での自己修養への彼の決意が力強く読者に響いて伝わる。“to front only the essential facts of life”, “to live deep and suck out all the marrow of life”, “to drive life into a corner” 等の表現は Thoreau の心の奥底に強い決意がなければ生まれてこないであろう。更に、この一節は、Thoreau の究極の関心が、自然の観察研究にとどまらず、自然の Thoreau の精神に与える影響であることを暗示する。

Thoreau が自然に入ったのは、人間の文明に毒されていない崇高な美と、本質的にけがれない清浄さを保持しており、生命のみなぎっている再生的な荒野なる自然がそこにあったからである。彼は、そのような自然の中にこそ、神を発見できると信じたのである。人為をしりぞけ、自然を観察することと自然を逍遙すること (sauntering) を通じ、自己の精神を高揚させ、宇宙の偉大な生命にせまろうとすることによって、自己の内面の二重性を統一しようとしたのであった。野的な本能を抑え、自己をより高い法則へ指向せしめ、自己を浄化することによって、その統一をはかろうとしたのである。Thoreau が *Walden Pond* で水浴をするが、それは、ガンジス河で水浴するのに似た、自己を清めるための宗教的儀式であった。低きへ向かう官能的な本能を抑制するために、生活上の節制をするが、これがために、生活の単純化という規律を厳格に自らに課すのである。単純にして質素なる生活は Thoreau の信条であったのだが、その目指すところは、外面生活の単純化よりも、内面生活の豊かさ

にあった。肉体をきたえ清め、想像力と直感力を敏感に保持し、霊的な活力を常に新鮮にたくわえ、深く感覚的に沈潜することがねらいであった。年間6週間労働説をとなえ、残りの時間はすべて自己修業に向けるべきだと説くのも、こうした彼の信条の結果であった。“Simplify, simplify. Instead of three meals a day, if it be necessary eat but one; instead of a hundred dishes, five; and reduce other things in proportion.” (W, 63)

Thoreau は衣食住すべてにわたり、単純生活を身をもって実践した。生活の簡素化を通じて自己を節制し、自己の精神世界を深く浄化したのである。人間は、浄化された内面世界を統一することにより、現象面に見られる「多」を通して「一」なる実体を見ることができると安藤教授が述べておられるが⁹⁾、そうした自己統一のために、彼は、「現在」という瞬間を凝視して生きる態度をとった。なぜなら、その瞬間にこそ精神の集中と統一によって人間は霊的な存在になりうるからである。“God himself culminates in the present moment, and will never be more divine in the lapse of all the ages.” (W, 67) 「現在」の瞬間において、自然と融合し、有機的な統一体である宇宙の中で、永遠なる「一」なる真実在に連なるものとしての自己を、彼は共感しようとしたのである。

Thoreau が小舎に住み始めてから数週間たった頃、恍惚たる忘我の境地を体験する。Walden の “Solitude” の章の冒頭は Walden Pond の岸を歩いていたときの次のような体験で始まる。“This is a delicious evening, when the whole body is one sense, and imbibes delight through every pore. I go and come with a strange liberty in nature, a part of herself. (W, 89) この時間と空間を超越した自然との共感的な霊交の境地を、夏の朝水浴をすませ小舎の戸口に日の出から正午まで黙坐していた時にも、静かに降る雨の日にも彼は体験した。Nature の中で “Standing on the bare ground... my head bathed by the blithe air and uplifted into infinite space... all mean egoism vanishes. I become a transparent eyeball; I am nothing; I see all; the currents of the Universal Being circulate through me; I am part or parcel of God.”¹⁰⁾ という Emerson のことばも、恐らく、超絶の極地である歓喜な霊交を述べていると思われるが、Thoreau の啓示の実体験程に読者にせまりくるところがない。これは、先に述べたように、自然の「意味」の解釈においては両者が同じく超絶主義者であるが、Emerson が観念的に論述する傾向があるのに、Thoreau は事実即ち自己の実体験を語るからであろう。

In the midst of a gentle rain..., I was suddenly sensible of such sweet and beneficent society in Nature, in the very pattering of the drops, and in every sound and sight around my house, an infinite and unaccountable friendliness all at once like an atmosphere sustaining me, as made the fancied advantages of human neighborhood insignificant, ... Every little pine needle expanded and swelled with sympathy and befriended me. (W, 91)

これは、外面と内面、現実と理想との緊張の中で、自然と人間の完全な調和という至福な楽園をかい間見るといふ啓示的瞬間であった。この神秘的な啓示の瞬間は、超自然の世界からふる神の恩寵に身をゆだねることによってというよりは、静かに瞑想し、全感覚を自然の

中に没入させ、自然の中に流れる霊の世界に身を託すことによって、到来したものであった。大自然の一部になるという共感的な一体感の体験は、神秘的な宗教体験にも似ている。仏教で言うところの「超絶的智慧」(transcendental wisdom) を感知しえたともいえよう。Thoreau は、事物の現象面をこえてその実体を見得し、永遠の生命の本源を直覚し、事物の真髓を洞徹したのである。この啓示の瞬間は、Thoreau が自然への歩みの中で求めたトランセンデンタリストとしての最終段階であった。それは精神の新生の瞬間でもあった。

5

Thoreau は、湖沼学、植物学、動物学等の分野で、立派な業績を残した。しかし、看過できないことは、たとえ事物の観察には誤りが起こりうるものだとしても、後の科学者たちが彼の観察の誤りやその記録の不正確さを再三指摘していることである。一例をあげれば、Bangor に80年以上を過ごし Thoreau の the Maine Woods に関する著作についての傑出した権威者である Fannie Hardy Eckstorm は、*The Maine Woods* の Appendix のリストの誤りを指摘している。彼女は、この地方で最もよく見られる“Canada jay” がリストにないこと、リストにある“wood thrush”はこの地方にはいないこと、“red-headed woodpecker”は *Picus erythrocephalus* ではなく *Ceophloeus pileatus abieticola* であることなど、多数の実例を上げて Thoreau の誤りを指摘し、Thoreau は鳥類学者でも科学的観察者でもなく絶対に科学者ではなかった、と断定している²⁹。

この彼女の結論は極論であるかもしれない。しかし、自然科学者や博物学の専門家による Thoreau の誤りの指摘は、彼の自然科学者の側面の限界性を決定的にする。限界性が彼につきまとう原因はどこにあるだろうか。前述したように、Thoreau は生来の自然愛好家であった。自然愛好者という点では Emerson も同じである。ところが、Emerson が巨視的 (far-sighted) であり、直接に超絶主義の世界に飛躍していくのに対し、Thoreau は Emerson 程観念的でなく、微視的 (near-sighted) であり、自然の一つ一つを忠実に観察し、鑑賞し味わい、そして楽しむという面をもっていた。このような自然への姿勢は、彼のうちにアプリアリに存在していたと言っていいかもしれない。そして、この姿勢は自ら彼の自然科学者の側面を生み出したのである。従って、この自然科学者の傾向は、彼が強烈なインスピレーションとイマジネーションにたけていた若き日の超絶主義的な書きぶりの作品や *Journal* の中に、すでに散見できるのである。自然科学的側面をもつ Thoreau が超絶主義者と呼ばれるのは、彼には深い自然愛と自然への尊敬の心があるからであり、更には何よりも、自然の背後に霊的なものを認めるからである。霊的なものは、理性によらず直観力と想像力により感知されるものである。Thoreau の自然愛とイマジネーションが合致するとき、誇張が生まれる。誇張は Thoreau の一つの特徴である。彼は自然の素晴らしさ、偉大さ、そしてその驚異に圧倒されるからである。ロマンチックで時にはドグマティックな叙述もここから生まれるのであろう。こうした Thoreau が、完璧に理性的で冷静な実証を行い、純粹に科学的であることは不可能である。科学は理性を基礎とするが、冷徹な科学者の目から見て、Thoreau の自然観察が不確実なのは、こうした意味からして起こりうることであった。またそれは、生来の彼の自然愛がそうさせたと思われる。愛が科学者の冷徹な目を迷わせたとも言えよう。

Thoreau は、自然を「そこ」にある実体としてとらえたが、一方ではまた、自然の実体の背後に霊を直覚したのであった。彼の自然は実体ある自然であると同時に、霊を宿す自然でもあった。そこに彼の自然観の二重性が認められる。それを Thoreau の作品全体の中で考えるとき、必ずしも統一されておらず、その両面が別々に現われるように見えることもある。しかし、*Walden* 中で見るとき、それは二律背反的なものではない。常に矛盾と分離をひきおこす二面的なものではなく、一つの方角へ向かう段階的な二重性であり、それは見事に調和されて、互いに「弁証法的」⁹⁹な関係で止揚されていると見ることができよう。なぜなら、Thoreau は、人間の精神の二重性を、進化・発展という相で捉え、上昇的な自己の完成を願っていたからである。*Walden* 中での Thoreau は、宇宙の中心的な生命の本源に連なるものとしての一体感を、共感的に勝ちとることを究極の目標にすえ、その達成のために、科学者か詩人かのどちらか一方に全く偏ってしまうことはない。彼のその両面が相補的な価値をもち、積極的な躍動感を作品に与え、作品全体をダイナミックに統一する要素になっている、と言えよう。例えば、先に述べた啓示的瞬間は、希望に満ちた自然界の再生と新生を表わす“spring”の章と対応して、*Walden* のクライマックスを作り上げている。また、自然観察を中心とした章と、Thoreau の超絶主義的な感覚で洞察された自然界の説明の章とが、大体において交互に織りなされ、各々の章の中でもこの両方の角度から語られることが多く、快い調和を作り出している。この二重性は、作品の中で融合し、動的で回帰的な季節のプロットのもつ有機性と符号して、*Walden* を見事な organic な統一体ならしめている。*Walden* は、このような光から見ると、Thoreau の自然への態度がよく現われ、Emerson がない Thoreau の自然観の二重性がよく統一調和した作品であるといえる。

Thoreau は Hawthorne, Melville, Twain, James, Hemingway, Faulkner 等と共に、神話的で非写実主義的なアメリカ文学の大きな伝統の流れの中にある¹⁰⁰。また一方、彼の文学を、アメリカ自然文学 (nature writing) の系列の中に位置づけることもできる。Thoreau に源を発するこの伝統は、今日の Rachel Carson, William Beebe, Edwin Way Teale, Joseph Wood Krutch などにつながっている。ただ、Thoreau の自然には、地理的・風土的限界のあることはいなめない。Krutch の描く西部アリゾナの自然も、中西部の廣大無辺の自然も、プレーリーの自然もない。Concord とその周辺の自然が中心であり、Maine の森や Cod 岬の自然もあるが、所詮 New England の自然に限定されている。

〔注〕

- (1) Henry David Thoreau, *Cape Cod*, ed. Dudley C. Lunt (New Haven: Norton & Company, 1965), p. 213.
- (2) J. Lyndon Shanley, *The Making of Walden; with the Text of the First Version* (Chicago: The University of Chicago Press, 1957).
- (3) Henry David Thoreau, *Walden and Civil Disobedience*, ed. Sherman Paul (Boston: Houghton Mifflin, 1960), p. 1. 以下、同書からの引用は () 中にWとページ数で示す。
- (4) “Children come a-berrying, railroad men taking a Sunday morning walk in clean shirts, fishermen and hunters, poets and philosophers; in short, all honest pilgrims, who came

out to the woods for freedom's sake, and really left the village behind," (W, 106) と、"pilgrims" という語が用いられている。心の平安と自由を求めて、森というけがれの無い自然に赴くために文明に毒された村を出てきた人々をそう呼んでいるのである。Thoreau は、森への歩みを、神聖な場所を目指す巡礼者の旅と考えていた、といえる。

- (5) John C. Broderick, "The Movement of Thoreau's Prose," *The Merrill Studies in Walden*, compiled by Joseph J. Moldenhauer (Columbus: Charles E. Merrill Publishing Company, 1971), p. 96.
- (6) Joseph J. Moldenhauer, "Walden: The Strategy of Paradox," *The Thoreau Centennial*, ed. Walter Harding (Albany: State University of New York Press, 1964), p. 21.
- (7) Lawrence Buell, *Literary Transcendentalism: Style and Vision in the American Renaissance* (Ithaca: Cornell University Press, 1973), pp. 188-207.
- (8) Henry David Thoreau, *Cape Cod*, ed. Dudley C. Lunt (New Haven: Norton & Company, 1965), p. 112.
- (9) Robert F. Stowell, *A Thoreau Gazetteer*, ed. William L. Howarth (Princeton: Princeton University Press, 1970), pp. 5-6.
- (10) *Ibid.*, p. 9.
- (11) *Ibid.*, p. 9.
- (12) Floyd Stovall, ed., *Eight American Authors: A Review of Research and Criticism* (New York: W. W. Norton & Company, 1963), p. 189.
- (13) Joel Porte, *Emerson and Thoreau: Transcendentalists in Conflict* (Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1967), p. 134.
- (14) Mark Van Doren, *Henry David Thoreau: A Critical Study* (New York: Russell & Russell, 1961), p. 72.
- (15) Walter Harding, *The Days of Henry Thoreau* (New York: Knopf, 1970), p. 19.
- (16) *Ibid.*, p. 38.
- (17) *Ibid.*, p. 116.
- (18) *Ibid.*, p. 195.
- (19) 絆川 羔「Henry Thoreau と Asa Gray」(『英文学思潮』第38巻, 青山学院大学英文学会, 昭和40年12月), p. 229.
- (20) 東山正芳「ソーロウの手紙」(『人文論究』第24巻第3号, 関西学院大学人文学会, 昭和49年11月), p. 6.
- (21) Clark Griffith, 「フロストとアメリカの自然」政田 惇訳(『日米フォーラム』第14巻10号, 好学社, 1968年10月), p. 55.
- (22) David Thorburn and Geoffrey Hartman, ed., *Romanticism: Vistas, Instances, Continuities* (Ithaca: Cornell University Press, 1973), p. 21.
- (23) Henry David Thoreau, *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (Boston: Houghton Mifflin, Sentry Edition), p. 182.
- (24) Ralph Waldo Emerson, "The Over-Soul," *The Selected Writings of Ralph Waldo Emerson*, ed. Brooks Atkinson (New York: Random House, 1950), p. 262.
- (25) Philip Walter Eaton, "The Middle Landscape: Thoreau's development in Style and Content," unpubl. diss. (Ann Arbor: 1971).
- (26) Henry David Thoreau, *The Maine Woods*, ed. Joseph J. Moldenhauer (Princeton: Princeton University Press, 1972), p. 64.
- (27) *Ibid.*, p. 70.

- ⑳ Henry David Thoreau, *Cape Cod*, ed. Dudley C. Lunt (New Haven : Norton & Company, 1965), p. 65.
- ㉑ Henry David Thoreau, "Walking," *Thoreau : The Major Essays*, ed. Jeffrey L. Duncan (New York : E. P. Dutton & Co., 1972), p. 209-210.
- ㉒ *Ibid.*, p. 213.
- ㉓ Henry David Thoreau, *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (Boston : Sentry Edition), p. 54.
- ㉔ *Ibid.*, p. 236.
- ㉕ 安藤正瑛『アメリカ文学と禅』(東京 : 英宝社, 1970), pp. 10-11.
- ㉖ Ralph Waldo Emerson, "Nature," *The Selected Writings of Ralph Waldo Emerson*, ed. Brooks Atkinson (New York : Random House, 1950), p. 6.
- ㉗ Fannie Hardy Eckstorm, "Thoreau's "Maine Woods"," *Thoreau : A Century of Criticism*, ed. Walter Harding (Dallas : Southern Methodist University Press, 1970), pp. 103-117.
- ㉘ James McIntosh, *Thoreau As Romantic Naturalist : His Shifting Stance toward Nature* (Ithaca : Cornell University Press, 1974), p. 11.
- ㉙ Stanley Edgar Hyman, "Henry Thoreau In Our Time," *The Recognition of Henry David Thoreau*, ed. Wendell Glick (Ann Arbor : The University of Michigan Press, 1969), p. 339.

(本論は、昭和49年4月1日青山学院大学において開かれたヘンリー・ソーロウ協会 (The Thoreau Society of Japan) で口頭発表した拙稿「ソーロの自然観の二面性——『ウォルデン』を中心にして——」を基に改稿したものである。)